

倫理観宗教観に立つ性教育の提唱

橋 田 義 雄

まえがき

今日世界的問題としてエイズの蔓延が大きくクローズアップしてきている。確かにエイズの蔓延は刻下の重大問題である。思えばエイズの感染は主として性交によるもので、性交によって生じる淋病や梅毒と違ってエイズは感染してから5年から10年の永い潜伏期間の後に発生し発病してからでは治ることなく確実に死を迎えるというのであるから、エイズは恐るべき問題の病である。しかも潜伏期間の間は自覚症状がなく、その間に性行為をすれば、本人も知らず、相手も知らぬ間に感染するというのであるから厄介である。

アメリカではエイズの防止という観点からコンドームの使用が一般に奨励され、又10代の未婚の女性の妊娠率の高さから、ハイスクール等においてもコンドーム使用を積極的に指導しているというのであるが、エイズ防止という観点とフリーセックスという流行的性生活の蔓延から、わが国においても、性教育の問題が小中学の青少年教育に重大な問題としてクローズアップして来ているのである。

もともと性教育の問題はエイズが蔓延する等という問題が起る起らんに拘らず、重要な問題として従来からも研究され論議されてきた問題であった、然しそれは性倫理という立場に立って純潔を尊重する狙いのもとに展開された性教育であったのである。

だが今日の一般に流布されつゝある性教育の論理は性倫理教育に非らずしてフリーセックスを肯定し「ストップ・ザ・エイズ」を目標とする観点からの性教育に転換しつつあるのである。

随って今日陸続として出版されつつある性教育の副読本にしても、又性教育の実践公開授業や講習会にしても、性倫理や宗教観等の価値観を除外した生理学的動物学的立場に立った指導展開が主であって中学生、小学生の高学年生に迄、性交や自慰行為を性欲本能の自然的必然的行為の展開であるとし、妊娠の弊をなくする為にコンドームの使用迄も指導するというが如き性教育が主張され、実践指導されるに至っているのである。

殊に、テレビに映画に雑誌週間誌、漫画にセックスに関する性環境は年令の如何を問わず青少年の視聴覚を通して自由自在に侵入してくるのである。こうした性刺激環境の中で成長する青少年に、宗教的倫理的価値観を除外した性科学としての性器の解剖や性行為の生理的解説や避妊の方法等を理解させるとしたら一体どうなるのであろうか、そこには動物と人間の区別なく、人間の性行為を動物的性行為と同一視して指導するという事は、一夫一婦の結婚生活も成立基盤をなくし愛欲の生ずる処、常に自由に性行為の展開が認められ、男女相互に相許す処あれば、夫であれ妻であれ、相互に性愛の満足感あれば、ほかに何の問題もないと言うのであれば、家庭生活はその意味を失い、生まれた子も誰の子か、血液検査をして見なければ納得出来ないという結果になるのである。即ち、家庭生活はまさに崩壊するという結論に至るのである。

コンドームを使えば、妊娠の心配もなく、安心して2人の性快感を満足し得る、等と主張し、又年頃の子供にマスターベーションについての説明においても、「性器を摩擦してごらんさい、快感が生じ性器は勃起するでしょう、之は年頃になれば極くあたりまえの自然現象で、そうした事によって快感をうる事は人間の権利で誰もが阻止すべき事でもありません」。と説述してマスターベーションを奨励するかの如き指導をする性教育が進歩的性教育であり性の解放であると主張している。かくの如く、只科学的という名のもとに性の解説を人間と動物との区別なく指導する一派の性教育はまことに憂うべき事で倫理観も宗教観もない性教育は何を狙いとし何を目的とするのか、性教育は倫理観宗教観の上に立脚せず、性欲性興味の趣むくままに展開するのは人間性の真の解放でもなく墮落への道である。と叫びたいのである。

以下こうした刻下の性教育の問題点に着眼し、真の性教育のあり方を考察し、世に問うものである。

(一) 性教育の目標

性教育を実践するには、先ずその目的が確率していなくてはならない。何をめあてとし何を狙いとして性教育を行うのか、その基本的態度が重要なのである。私は、異性の相互理解と、敬愛、将来の家族生活の素地の育成、性に関する科学的理解、性環境に対する適応能力の育成である。この五つを狙いとしてここに提唱する。

(1) 異性の理解

社会構造の基礎をなす単位は家庭である。社会活動は家庭生活を基礎として展開される、家庭は男女の生涯にわたる永い共同生活によって営まれるものである。男女の共同とは民主的人間関係の上に立って平等であり公平であって、差別があってはならない。だが現実には、男女はその身体構造を異にし、機能を分担し、性格、気質においても、夫々その特性があり、差異があるのである。男女はその特性によって家庭生活の役割を異にし分担をになうのである。男女の相互理解がなければ、異性の共同生活は不可能である。戦場に出て戦うのは男性の特性であり、妊婦となり子を孕み出産するのは女性の特性である、随って幼児期より育兒の任務を背負い世話をするのは女性である、特殊の例は色々あるとしても、之が男女の性差からくる一般論である。そこに男らしさ、女らしさの特性が論ぜられるわけである。もし男女の相互理解がなければ幼児期児童期から優劣による男女の偏見が形成されるであろう。

児童期になれば小学2・3年生にして走跳投の能力に男女差が生ずる。それなのに指導者が男女差を無視して競技をさせるとすれば、1, 2, 3位と優位の地位に男子が並んでくる、女子は下の順位におちるであろう。そうだとすれば男女の優位性において男子は常に優位の地位につくのである。身体構成の特性から男女は別々に競技をすべきである。走跳投では男子は女子より勝れている、然しリズム運動、音楽遊戲等の柔軟な運動には女子が勝れている、という相互

理解と相互尊重の認識のもとに教育されねばならない。

幼児が混浴するとき、性器の違いを見て尋ねる「どうして僕にはオチンチンがあるのに花子ちゃんにはないの?」と、そのとき母は教師となり、之を性教育の場としてとらえるのである。

「花子ちゃんは女でしょう。一郎君は男でしょう。花子ちゃんは大きくなったらお母さんになって赤ちゃんを生むのよ、だから違うの」、それで納得すれば、それでよい。だが、つつこんで「どうして?」と聞いてくれば、それに応じた真実を幼児期の心理にそくして答えるわけである。男女の相互理解は幼児期から始まるのである。

(2) 異性への敬と愛

性教育の狙いの第二は、異性に対する敬愛の心を養う、ということである。異性を自分より劣る者だと見下だしたり、性欲の対象として見るのではなく、異性に対して相互敬愛の精神をもつことである。

日本には武家政治の頃からと思われるが、男尊女卑の風習がある、江戸時代からは、それが益々顕著にあらわれている。男女平等と民主主義をうたってはいるが、今尚、男性には心の内層深く女性軽視の心情が潜在している。女性も又、夫を主人という概念で呼ぶように、男性に対して自己卑下の心情がある。なる程、走力、跳躍力、投力では男性は勝れている。それが優越感に連なってくるのである。然し「男子は女子より走、跳、投では勝れているよね、けれど縄とびとか、お手玉とか、リズム運動など柔軟な身体活動では、女子は男子より優れているよね、おのおのの身体が異なり、機能が違うのですよね」と理解させ相互尊重の精神を培うのである。

(3) 将来の家庭生活の素地に培う

人生は2つの生活場面からなり立っている。即ち家庭生活と職場生活である。殊に今日では、男は外に出て働き女は内にいて家事に従うという時代ではなくなっている。女子大学の100%が就職を希望する時代である。主婦にしても、子供が児童期に達し、学校に行くようになれば、パートタイムの職業婦人になる者が増大している、男性も女性も、正に人生は家庭と職場の二重構造である。

人は家庭に生まれ、家庭に育ち家庭に死す。家庭生活は人生の最重要なる要素である。同時に人は社会人として社会活動の一端をになわねばならない。即ち、職業生活である。職場と家庭の二重生活が人生なのである。

性教育の狙いは、この将来における家庭生活の素地を培う事である。即ち家庭生活人としての男性女性の基礎的態度を養うということである。父と母の仲の良い相互尊重、相互敬愛の生活の実態に子供が幼児期から接しておれば、それは将来家庭生活を営むに際して自然に言語、態度、性格、気質となって現象するものである。夫婦生活の実相が、子供達の将来の家庭生活の様態を形成するといっても過言ではない。性教育の狙いは、随って日常生活の仲で、その両親が理想の夫であり、妻である実態を展開して、理想の男性、理想の夫、理想の父を現実の姿の中で子供心の深層深く刻印する処にあるのである。

父も母も夫々不倫をして愛は冷たく冷えきった家庭環境では、美事な性教育の花は咲かないという事である。いうなれば、性教育の基礎には性倫理の土壌がなければならぬということである。父母の日常の生活態度が子供達の将来の家庭生活人としての素地になるという事である。

(4) 科学的に性の理解を指導する

子供も 11, 2 才に達すれば、第二性徴が発生し男女夫々身体的に生理的にそして心理的にも大きな変化が発生する。男性における容貌の変化ひげの発生、陰毛の発生、のどぼとけ（咽喉）のふくらみ、射精現象等刻々の変化が発生する。女子は乳房が乳頭期から乳暈期、乳房期へとふくらんでくる。骨盤が拡大しメンスが始まる。これらの変化は子供の世界から大人の世界に心身が移行する現象である。男女のこうした変化について、生理的な科学的理解を与える事は大事なことである。第二性徴の生理学的変化は必然的に性の欲求行動を現象し異性に対する接触態度はこれ迄と大きく違ってくる。そうした心理的变化に対する自己理解を与え、異性に対する接遇、男女交際の適応行動の指導が行われねばならない。

性科学は進んで、妊娠受胎の経過、胎児の成長過程、出産に至る生理学的理解を与える必要がある。性の理解は必然的に性の適応能力に関与してくるので

ある。

(5) 性環境に対する適応能力を身につける。

刻下の社会環境は、性欲の刺激という観点から見れば、まことにすさまじいものがある。テレビにラジオに、映画に週刊誌に、好むと好まざるとに拘らず、性的興味をそそられ、性欲を興奮させる刺激環境が甚大である。清潔で閑静な家庭の中にいても、それらの情報器機を除外し、マスコミの侵入を避ける事は容易ではない、例え防壁を築いて防ぎ得たとしても、一度、社会に出れば至る処に、性的刺激はおそいかかるのである。殊に性欲の激しい台頭期にある青少年にとっては、その影響する処強烈なるものがある。今や刺激環境を遮断し防壁を築くだけでは、純潔教育は不可能である。

親子揃って警察映画を見ていても、必ずという程、ベッドシーンが出てくる。出て来た場面で目をつぶれ、見てはならぬ、とは言えたものではない。そんなことをしていたら、事はむしろ逆効果をもたらし、子供達の好奇心は却ってそられる事になる。親はむしろ、こうした場面での子供の反応を観察し、強い刺激を受けているのか、見なれて、さほどの感情反応はないのか、嫌悪感でみているのか、興奮躍動しているのか、後遺症があるのかどうか、静かに観察して対処すべきである。或は問題場面を指摘して親子が意見の交換をし、会話を進めるのも一方法である。

中学生の頃の男女交際の仕方にしても、禁止禁止の対策だけで純潔教育を施そうとしても、四六時中親が監視する事は出来ないのである。積極的に男女交際の礼儀作法を指導すべきである。

以上性教育の狙いは ①異性の理解 ②異性への敬愛 ③家庭生活の理想的な建設のための素地の育成 ④性の科学的理解 ⑤性環境への適応ということである。

進歩派と称する性教育理論は、科学的な生理学的性の理解を中心にして性教育を推進し、異性への敬愛もなく又将来に対する理想の家庭建設へのビジョンもなく、性意識、性欲の発生を自然の人間性であるとし、性欲の欲するままに男女が合意し納得すれば性交も許さるべきである。妊娠の問題はコンドームを

使用すれば何の心配も懸念もなく、性の快感と満足感が残るだけであるとし、性の欲求と満足、快感は男女の人権であると主張し、性の解放を主張している。かくの如き性教育を展開すれば家庭生活は崩壊し破滅するであろう。その良き例が性解放の先進国と言われるアメリカである。

離婚率が50%に近く10代の娘の妊娠が毎年100万人以上とも言われ、エイズ患者の数が推定100万人だと言われるのである。こうした現象がわが国に蔓延するとすれば正に重大な社会問題である。性教育は家族倫理、性倫理の上に立つて行わるべきで、性欲の進むがままにではなく、欲求と理性の葛藤の中で抑制すべきものは抑制し耐えるべきものは耐える教育がなさるべきである。人間と動物の違いがそこにあるのである。男性が女性を愛する、之は人間性の自然である。然し相手の女性は人妻であるというのであれば求愛行動はさけねばならぬ、それが倫理であり性教育である。

(二) 性教育の方法原理

(1) 発達段階に即して真実を科学的に

性教育における第一の基本的な方法原理は発達段階に即して真実を科学的に指導するということである。発達段階とは人は、幼児期、児童期、青年期、壮年期、老年期という発達の段階がある。正しい性教育は、相手の発達段階に即して、その生活課題として発生してくる性の問題を、真実に科学的に指導しなければならない。幼児が赤ん坊の誕生を好奇心をもって尋ねてくることがよくある。そんな時、ベルカンが籠に入った赤ん坊を大空からもってくるといったような偽りを教えてはならない。おかあさんのおなかから生まれるんだと真実で答えるのである。好奇心に富む子は、おなかの何処から、どうして、と尋ねてくる。母親は突然、無から有に、子供の出生を指示するのではなく、腹部が誰の眼にも大きく目立つようになれば、その兄姉となる子供にも、赤ちゃんが間もなく誕生する事を予告し兄として姉としての心理的指導をしておくべきである。それでも子供が何処から生まれるのかと尋ねるのであれば、幼児期には赤ちゃんの通る穴道があって、その狭い道を通して、おしっこが出る近くの

出口から生まれるという風に指導するのである。3・4年生の児童期であれば、子宮の図を描き、そこで母とへそのおで連なり、栄養をとり成長する生理を説明し子宮から膣を通して生まれる事を科学的に理解さすべきである。

性教育は幼児期や児童期にだけ必要なのではなく、青年期は勿論、壮年期、老年期にも必要で生涯教育の重要な要項である。老年期にはセックス等ないから、性教育等必要としないと反論する者もいるだろうが、左に非らず、老夫婦の愛の生活が老夫婦なりに重要になるのである。此の点は拙著警鐘乱打の家庭編の夫婦生活の生涯という処で論述している。40代、50代でも性教育は必要で、結婚しておれば一般的に10年内外で飽和という性の倦怠期がやってくる、即ち刺激感が消失してセックスの魅力が失われるわけである。此の時期にバンデベルデや石川達三の『完全なる結婚』等に記されているように、性意識の進化、発展、変容といった自己認識、自己変容が必要になる。即ちなりゆきまかせの自然主義では発達が生じないのである。性教育は生涯教育の重要要素として必要になるわけである。発達段階に即して、その時代その時代にふさわしい生涯かけての性教育が行なわれなければならない。

(2) 性教育はその背景に倫理的、宗教的な価値観を持って行われること

家や学校で兎を飼育する、必ずつがいで飼うもので、之が正常な飼育である。見ている子供の前で発情期の行動が始まる。雄が雌を追いつめるのである。子供はオヤと思って親に尋ねる「あれは母さん何をしてるの」と、此処で性教育が始まらねばならない。此処で生理学的科学的説明だとして、単に動物の交尾現象を説明するのと、人間的価値観の上に立って指導するのでは、大きく違ってくるのである。「前の兎が母さん兎でね、後の兎が父さん兎なの、あれはね、夫婦兎が仲良くしているのよ、あんなにしていると、きっと母さん兎に赤ちゃん兎が生まれるのよ」と、夫婦の愛の倫理にそって美しく、しかも真実をゆがめないで教えるのである。大抵の幼児は、その程度で納得し赤ちゃんの誕生には男女両性の愛の交接が必要であることを暗々の中で察するのである。それでもどうしても進んでくる幼児がいたら、お父さん兎が赤ちゃんの素をお母さん兎に送っているのだという風に話を進めるのである。勿論4、5年生にもなれ

ば求めに応じて生理的説明にまで進めるのである。

只その場合、動物的交尾行動と同じ次元で、人間の夫婦の性愛行為を論じてはならないという事である。

親鸞上人でさえ、仏教が、結婚を性欲の一還として禁止していた時代に朝比那姫と情を交え、後年新潟に流された時、村の娘と結婚し子を設けている。それは性欲に負けたのであろうか、だとすればそれは破戒僧である。親鸞は欲情に負けた墮落僧となるのである。

親鸞上人は人間性の原点を深く省察し性愛の聖なる人間性を大悟したと思うのである。

夫婦の性行為は子供を作る為めとか、性欲の満足のためとか、という意識を離れて、夫婦愛は欲情を越えた一体感情であろう。夫と妻が心身一如の次元に達した相（すがた）である。随って男女の間には恥らいもなく、体面もなく、男女の差別もなく、求める者、求められる者の間隙もない一体感である。即ちそれが純粹愛である。勿論、だからといって、世の夫婦の性交が凡て純粹愛だと言っているのではない。愛にも不純粹愛、即ち享楽愛があり打算愛があり征服愛がある。少なくとも親鸞の夫婦愛は純粹愛で、それは性欲行為としての欲求行為を越えた次元に達したものであると思考される。断じて動物の交尾行動と次元を同じくして語り得るものではない。若し父母の交尾の結果、子供即ち自分が生まれたんだと理解すれば醜い性欲行為の結果が自分であるという嫌悪感を痛感し、父母の権威は地におちるであろう。人間の愛殊に夫婦の愛は純粹愛であって断じて動物の性欲愛と次元を一にして論じてはならないのである。

青年男女の性交行為にもかくの如き性倫理、宗教観の上に愛が認知されてこそ許されるべきものであって結婚の意志もなく、只性欲の求めるがままに性交し、性の快感を味わうというのが如き不純愛で交性すべきに非らずという、性の倫理を充分に背景として性教育は進められねばならない。

（三） 具体的性教育の展開

性教育の目標と方法原理が確立されるれば、次に必要なことは具体的な性教育

の方法である。具体的な性教育の方法を展開するには、先ず性意識の発達段階を指導者は理解しなければならない。

人間の性意識が、幼児期から老年期に至る各段階において如何なる変化、発達をしていくのか、之をよく知らなければ、具体的な性教育は展開する事は不可能である。如何に倫理観や宗教観を論じて、性教育の実践は効果をあげることは出来ない。そこで次に性意識の発達段階と、それに応ずる性教育の実際を以下論述する事にする。

(1) 幼児期……性の無関心時代

幼児期は性の無関心時代で男性、女性という性意識は一般的にはない。只注意しなければならないのは、今日は性環境が非常に複雑多様であるから、その子の周囲の性環境によっては早いうちから性意識が出てくる幼児もいる、個人差が非常に大きいのである。

一般的にはキャンベル等が言っているように6・7才頃迄は、男女が混浴しても、恥じらいは生じない。父親と幼児の娘と一緒に風呂に入っても、又母親と息子が一緒に入っても別に違和感はないのである。

同じように町の銭湯に6・7才位の男の子が女風呂に母親と入っても、逆に男風呂に父親と女の子が入っても一般的にはそれ程違和感はない。この頃迄は性についての関心度はあまりないのである。只性環境に接した時、好奇心的興味は発生する。例えば、鶏の交尾を見たり、犬や猫の交尾を見る時、幼児といえども興味は発生する、子供に興味や関心が発生すればそれは性教育のチャンスである。若し起こらなければ、無理に注意をひき起こして性教育をする必要はない。随って性教育は非常に個別的で、その子の性の関心の度合いや意識の持ち方に対して個性的指導が必要になる。

「お母さん、鶏が重なっているけど、あれ何してるの」と子供が聞けば、「あれわね、オンドリが、メンドリにひよ子のもとを送っているのよ」と指導する。「オンドリがひよ子のもとを送らないと卵は産んでもひよ子にならないのよ」という具合に極く自然に品よく情操豊かに指導するのである。

此の幼児期の段階で必要な事は雄と雌との関係によって赤ちゃんが生まれる

という事を自然環境の中で、真実に即して正しく教示するという事である。

赤ん坊の誕生にしても、父と母が愛情深く仲良くしているという前提のもとに教えなければ動物の交尾と同じ次元で指導したらとんでもない事になる。随って幼児期は夫婦の性愛等にふれる必要はない、自然環境の中で雄と雌との関係で赤ん坊が生まれる事を理解させればよいのである。

(2) 児童期 …… 性興味関心時代

小学2年生の頃になると性興味が発生し、これ迄の花子と一緒にいていた太郎が、朝、誘わなくなったりする。これ迄の無関心な性差を感じ、男女が手をつなぐ事に意識が生ずるのである。3年生になれば机の配列にも興味を示し男子がどの女子と並ぶか、という事は、かなりの関心事なのである。

走跳投の能力にしても男女差はかなり顕著になる、随って放課後の遊戯にしても男女はグループを別にして行うようになる。男女の意識は益々はっきりとするのである。体重測定等3, 4年が裸の身体で同室するというのは、一般的には行われている様だが場合によっては別室が適当なこともある。まして5, 6年になれば早熟な子と晩熟な子の成長差が判然としてくる。第二性徴期に入る子も生ずるのである。此の頃になれば異性への興味関心はかなり高くなる。女子にしても乳房期に入った子もおれば、乳頭期の者もある。こうした身体の変化は自分の身体への興味関心と同時に他者の身体にも異常な関心を示すのである。随って5, 6年生は男女別室が望ましいわけである。

5, 6年生になれば、夫々同性異性の身体について強い関心を有してくる、男女夫々の生理現象に就いての理解や性交による受精、子宮内における胎児の発生と成長、そして出産にいたる過程等も科学的に図解によって理解さすべきである。但し人間の場合は、聖なる純粹愛の夫婦間における結合で、妊娠は聖なる心身一如の一体感による交性の中で稀に現象する精子と卵子の結合によって生ずるもので、夫婦生活の生涯の中で数度、結合が完成するものである事等、児童の発達段階に即して指導し、夫婦の和合一体の愛の結果の結晶が出産である事を倫理観宗教観を背景として説明すべきである。

(3) 青年前期 …… 異性思慕忌避空想時代

中学生時代ともなれば、異性への興味関心は急激に高まり、第二次精微の現象と共に、異性思慕の行動が高まってくる。然し現実の生活環境では、たやすく見出し得ない彼等は、思慕の対象を映画のスターや歌謡曲のスター等に向け、ファンとして異常な迄に情熱を燃やすのである。劇場等でスターやアイドルに熱狂するファンの大部分は中学生時代の青年期である。

青年前期の彼等は異性思慕の対象を、生活環境の身近な所に見出しても、現実には交際を申し込む自信がなく、又羞恥心も強く作用して悶々として苦悩する事が多く、愛はひそかに内に閉じて表出するすべがなく、空想の中に展開するものである。即ち異性思慕空想時代となるのである。

性行為の空想は自慰行為となり、Kinsey 報告によれば13才で男子45%、14才で72%、15才で82%という経験者である。

自慰行為 (Kinsey 報告)

10才	2 %
11	6.1
12	21.2
13	44.9
14	71.7
15	82.2
16	87.6
17	90.2
18	91.8
19	92.1

総理府調査(1985)

小5	14.2%
6	22.2
中1	53.6
2	75.0
3	85.2
高1	89.4
2	90.7
3	91.2

〔マスターベーション〕

青年期ともなれば、性器が刺激に反応して、自転車に乗って、ペダルを踏んでいる時に摩擦をして性快感が出てきたりして自然におぼえる事もある。或は週刊誌や友人との会話等で覚えるもので

ある。然し積極的にやってみよという様に勧誘奨励する必要のものではない。医学的生理学的に見れば、マスターベーションは一週間に一度とか三日に一度とかいうのは何の弊害もない。然し精神的、人格的に見れば、自慰には空想が常に付随する、性刺激に応じて無節操に自慰を実施していると次第に頻度が増し、空想が次第に激しくなり度が越してくると青年の発洩さが消失してゆくのである。自慰はむしろ勧めるよりも自制する様に指導し欲情が生じたら、剣道の素振りをするとか、ジョギングに出るとか、体を使う事によって煩悩を断ちきる様に指導し、自分自らの力、即ち耐性を育成するように指導するのが教育

である。

(4) 青年中期……異性求愛近接時代

青年中期はその大部分が高校生の時代である。此の頃になれば、之まで内心ひそかに思慕し空想していた性愛の欲求が高まり、映画や歌謡曲のスターでは満足いかなくなるのである。現実のリアルな生活の中に、思慕の対象を求める様になる、然し現実には、そうた易くデートの対象を見出し得ず、思慕の情のはけ口に苦悩し焦燥するのである。彼等は眼前に迫り近づく大学進学目標に自己をむち打ち、自己抑制に自慰行為を補償する者も多くなるのである。

青年中期はいわゆる恋愛時代である。身近な生活環境の中に思慕の対象をもとめる。だが自己表現のパフォーマンスを持たない彼等はレターにしたためて相手に心中の苦悩を訴えるのである。之が初恋の頃の青年中期に多いのである。幸にして、自然の中に交際の相手を見出し得た者はデートが始まり、愛情は急速に高まり性交関係にまで発展する。

総理府青少年対策本部・性交経験調査

左の表は総理府

	年令 年	才 13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
男	1974	0.6%	1.5	3.3	6.3	9.2	14.2	20.5	26.8	28.1	
	1981	0.5	1.4	3.9	6.8	9.8	17.6	26.0	37.4	46.8	56.1
女	1974	0.6%	0.9	1.8	2.4	4.6	7.8	6.8	11.2	15.9	
	1981	0.2	0.7	2.4	5.3	7.6	10.4	17.1	28.0	36.5	37.7

の調査である。全国の七都市、札幌、秋田、東京、名古屋、京都、松江、熊本の中から抽出した75校の高校、短大、大学に在学

する者の性交経験者の累積%である。16才の高校時代から次第に増加している。男子で見れば17才高校二年生で100人中およそ10人の者が性交経験者で50人のクラス中5人の割合である。大学生に達すれば20才で37.4%であるから50人に約20人即ち5人に2人は経験者という事である。女子も20才に達すれば28%で50人に14人の割で6人に2人はセックスの経験があるという結論になる。こうなれば避妊の方法を性教育でも実施しなければ、という論が生ずる。そこでコンドーム使用が実施される事になり、コンドームの配布迄、高校で実施すると

なれば、アメリカ式となり、性交は快楽の対象となり既婚、未婚の如何に拘らず性生活の乱脈を来たし、家庭生活は崩壊に至るのである。此処に純潔教育の性倫理が青年期の性教育に必要条件となる。

文化的な人間生活も欲望、欲求の赴くがままに進展すれば、生活は墮落する、家庭も社会も頹廢し荒廢し崩壊する。欲求は理性によって抑制せられ阻止せられねばならぬ。それが戒律であり道德であり倫理である。

〔愛情があり男女が合意すれば性交は許せるか〕

若い者のアンケートでは、男女が合意すればセックスは認めらるべきであるという、アンケートの肯定率が一般に高い。愛情の合意というが、その愛情が問題であり合意が問題である。此の愛情は恋愛感情であろうが恋愛にも純粹恋愛

恋愛	純粹恋愛	<ul style="list-style-type: none"> 肉体恋愛 精神恋愛 	> 完全恋愛
	不純粹恋愛	<ul style="list-style-type: none"> 享樂恋愛 打算恋愛 虚榮恋愛 	

愛があり不純粹恋愛があつて、必ずしも情操豊かな純粹の愛情とは限らないのである。愛しあふ男女には、その処を充分に反省考察して愛が盲目に陥らぬ様に理性し諦観すべき

である。愛だ、純粹だといっても地位や名門にひかれ、財産に目がくらんだ愛もある即ち打算恋愛である。本人はその意識がないと思つていても、潜在意識には強く深く横たわっている事もある。又一時的性欲の衝動にかられている場合もある、燃える火はやがて鎮火する。即ち享樂恋愛である。結婚生活は恋愛生活ではない、倫理観、人生観、生活観ともいふべき男女の一体観が成立する処に50年、60年の共同生活が成立するのである。こうした男女愛に対する充分なる理解と考察態度を此の青年期において指導すべきである。

(5) 青年後期……現実的交際時代

高校以後の青年期即ち後期は、そのなかば即ち48%が就職し、そのなかばは短大生か大学生である。此の時期は、身体的にも精神的にも成熟した状態である。だが大人としての自主独立の生活は不充分で、社会人としてもまだ経験不足の未熟さがあり、経済的にはまだ親に依存するという時代である。

随つて、彼等は性的には充分熟しているにも拘らず、一家を建てて性生活を

展開する事の出来ない時代なのである。Sexual Unemployment 性の失業時代なのである。即ち身体的にも精神的にも結婚生活を営む事が出来るにも拘らず現実的には結婚生活をする事の出来ない性の失業時代というのである。

此の期の女性の男女交際は、結婚という終着駅を描いての交際となる事が多い。随って多くの交際は特定の男性に永く継続して行なわれるという傾向を示すのである。だが男性の方は、学生にしても勤労青年にしても、経済的には家庭を持つ余裕がなく、性欲の欲求は強いが結婚生活にふみきだけの自信と決意はない。多くの男性は独身生活の自由な恋愛行動即ち享楽恋愛を楽しみたいとする者がかなり多いのである。

ともあれ此の期の男女は家庭設営の入口に立って不安動揺する焦燥時代である。